



宮農情報

「あまおう」12月の管理

第30号 平成26年12月9日

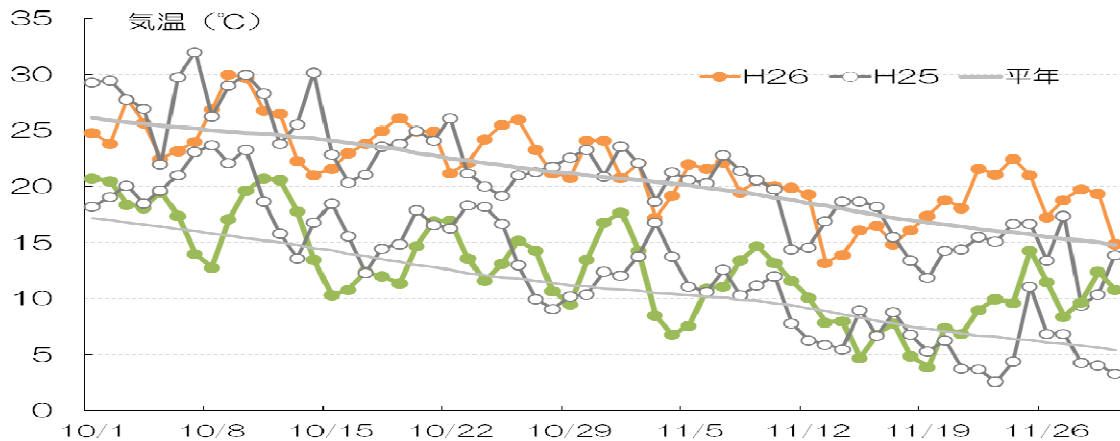
南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t以上を目指しましょう

今年産のあまおうは、平年並みの11月中旬から出荷が始まりましたが、全体的に生育は遅れており、今のところ昨年と比べ出荷量は少ない状況です。品質は大玉傾向で良好です。ただし、昼温が高いこともあり一部で過熟での出荷が見受けられます。

現在は、気温も低下してきたことから玉伸びしており、早期作型で2～3果収穫、普通作型で緑熟～白熟程度の生育状況となっています。

着果負担と朝晩の冷え込みで、心葉の葉柄長の長さが短くなっているほ場が見られます。また、早期作型、普通作型ともに早進株が多いため、今後株が弱り始めることが予想されますので、心葉の伸長状況を確認し、草勢に応じた栽培管理を行って下さい。



(アメダス 久留米データ)

電照時間の調節

果房の連続性向上と収量増加のため、草勢が適正に維持できるように電照時間を調節して下さい。

- 電照時間の調節は、心葉の展開状況を観察し、株の着果状況や天候から今後の生育を予想して行う。
- 電照時間は2時間～6時間の範囲で調節する。
- 心葉の展開位置が、外葉より低くなり始めたら電照時間を延ばす
- 夜温が高いと電照効果は高くなる。

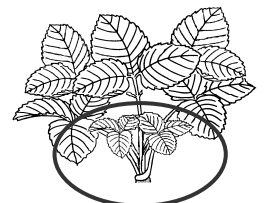
【心葉展開時の葉柄長の測定】

心葉は外葉より、葉色がややうすく、つやのある葉が展開



【電照時間調節の目安】

	時間を長く	現状維持	時間を短く
心葉の葉柄長	8cm以下	9～11cm程度	12cm以上
心葉の色	濃緑色	緑色	黄緑色
着果負担	増加	並	減少
予想気温	低温	並	高温



わい化状態の心葉

温度管理

厳寒期の着果負担に負けないように、草勢を維持する。

果実の肥大期は高めの管理、収穫期は低めの管理とする。

- 株が小さく生育が遅れている場合は、やや高めの温度管理で生育促進を図る（午前中は遅めに換気、夕方は早めに閉め込む）。ただし、うどんこ病の発生が見られる場合は、やや低めの温度管理を行う。
- 換気で急に温度が下がらないよう、サイドや谷の開け幅を調節する。
- 風上側のサイドは、風下側よりも狭く開ける。
- サイドの内側や谷には内ビニルを張り、冷気が直接吹き込まないようにする。
- 果房の出蕾期には暖房機の設定温度を上げて、早期開花を促す。
- ハウス内の温度ムラは暖房効率を低下させるので、ハウスの両サイド・中心部・暖房機から遠い所等、数か所に温度計を設置して、温度ムラがないかを確認し、温度が均一になるようダクトを配置する。



＜冷気の吹き込みを防ぐため設置された内張り＞

【 温度管理の目安 】

生育ステージ	昼間	夜間	備考
1番果房収穫期	20～24℃	5～7℃	収穫中は品質向上のため低めの温度管理 12月中旬以降はやや高めに変更
1番果房収穫終了後 2番果房出蕾～肥大期	24～28℃	5～7℃	2番果房の生育促進と、3番果の早期出蕾 を目的として高めの管理

かん水管理（pF目標値1.7～1.8）

- かん水は地温を下げないように、収穫終了後の午前中に行う。
- かん水は少量多回数で行い、高温管理する場合は、かん水量を増やす。
- pFメータを設置し、マルチの上から指で触ったり、マルチをはいだりして水分状態を確認してかん水する。
- 常に葉水の出方を確認し、出ない場合は、かん水を行う。
- かん水不足の場合、①草勢が低下する、②心葉の先に葉水が出ない、③葉や果実のツヤがない、④果実と果梗の離れが悪い、⑤通路に亀裂があることが多い

肥培管理

- 液肥は、株が弱らないように定期的に施用する。
- 液肥は、窒素成分で月に1～2kg/10aを2～3回に分けて施用する。
- 毎年、先青果や先白果の発生が多いほ場では、施用量を減らす。

ジベレリン処理

- 2番果房出蕾期や、草勢が弱く株のわい化が予想される場合に、5～7ppm程度で5ml/株の処理を行う。
- 生育が旺盛な場合（心葉の葉柄長が15cm以上）は、ジベレリン処理を行わない。

ジベレリン協和液剤の登録内容

作物名	希釈倍数・使用量	使用方法	使用時期	本剤の使用回数	使用目的	散布液量
いちご	ジベレリン10ppm	株の中心部に散布	頂果の出蕾直後～開花直前	1花房あたり1回	果柄伸張促進	1株あたり5ミリットル
いちご(促成栽培)	ジベレリン10ppm	茎葉全面散布	休眠に入る直前(冬場の低温期)	1株あたり6回以内	着果数増加、熟期促進	1株あたり5ミリットル

摘果、果梗・古葉の除去

- 摘果は、2番果房の出蕾を確認し、1～2番果の葉数に応じて行う。
- 早進株は株疲れしやすいため、1番と2番果房を合わせて10～12果/株に摘果する。
- 1番果房の収穫が終了したら、すみやかに果梗を除去する。
- 葉かぎは、傷んだ葉や黄化した葉のみを除去する。ただし、ハダニ類及びうどんこ病が多発しているほ場では、強めの葉かぎを行う。
- 草勢が強い場合は多めに、草勢が弱い場合は少なめに着果させる。

【 1～2番果の葉数と摘果数の目安 】

1～2番果の葉数	4～5枚	6～8枚	9枚以上
1番果房の着果数	7～9果	10～12果	裾花のみ摘果

その他

- 成り疲れを軽減するため、発根促進剤（チャンス液、パフォームソイルなど）を流し、根の発達を促す。
- ミツバチの活動が悪いと奇形果が多くなるため、訪花状況(※)を常に確認する。ミツバチの活動が低下する原因には、低温・花不足（餌不足）・農薬などが考えられる。

※訪花している場合は、開花後、すみやかに雌ずいが褐変している。

- 炭酸ガス発生装置は、日の出時に濃度が2,000ppm程度となるようタイマーをセットし、早朝の換気を避ける。また、併せて硫黄くん煙剤を使用する場合は、亜硫酸ガスの発生防止のために、硫黄くん煙剤処理終了後3～4時間以上あけてから炭酸ガス発生装置を稼働させる。

【日の出の時刻の目安】：大川市

12月10日（7時10分頃）、12月20日（7時17分頃）、

1月1日（7時22分頃）、1月15日（7時22分頃）、1月31日（7時15分頃）

病害虫防除

○灰色かび病・菌核病

- 湿度が高いと発生しやすいため、できるだけ換気を行う。
- 曇雨天日などは、暖房機の送風や循環扇を活用する。

○うどんこ病

- 病原菌は乾燥条件で蔓延するが、胞子の発芽には高湿度が必要なため、ハウス内が多湿にならないように換気を行う。
- 軟弱徒長した株に発生しやすいので、多発したほ場ではやや低めの温度管理を行う。

※ 灰色かび病、うどんこ病は、発病部位を速やかにハウス外に持ち出す。
また、定期的な薬剤散布による予防に努める。

○ハダニ類

- 春先の急増を予防するため、ハダニ類の活動が衰える12月に防除を徹底する。
- ハウス内の乾燥しやすい場所や出入口など、毎年発生しやすい場所を特に注意して観察する。
- 地面に葉が垂れていない状態程度の葉かぎを行った後、薬剤散布を行う。

○スリップス類

- 年内に飛び込んできたスリップス類をしっかりと防除し、ハウス内で越冬させない。
- 薬剤散布の際には、ミツバチへの影響日数に注意する。

○アブラムシ類

- 保温開始期以降の防除を怠ると多発する。寄生部位は、果房が伸長してくると果房に、果房が老化するに従い株全体の葉裏に多くなる。
- ほ場周辺の雑草を除去する。

親株管理

専用親株を雨よけハウスに入れている場合は、休眠を覚ますためハウスサイドを開放し、十分に低温に当てる。

秋ランナーを使う場合は、年内までに雨よけのプランターなどに定植する。

親株定植前に冷蔵処理（5℃以下の低温に20日間程度）を行うことで、春先のランナーの発生が良くなる。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！